

# 福田寺だより

発行

55

神奈川県小田原市飯田岡二五七

飯田山 福田 田 土寸 36-27

住職 橋本尚信

## 密教とマンドラ

——NHK市民大学放映に寄せて——

七月のおせがきの時に紹介いたしましたNHK市民大学の「密教とマンドラ」も九月二十日放送を以て、十二週に亘る放映が終了致します。毎回ご覧になっていらっしゃる方もおられるでしょうし、一回目だけで止めてしまった方もあるかと思えます。

この講義で頼富先生は何を云わんとしているのか考えますに、「マンドラを通して、仏と人との合一を指しているのが密教である。」ということだと思えます。つまり、仏は

遠く離れた存在ではなく、究極的には自分自身が仏と成ることをこの世で実現することが密教であり、その状態を表現したものがマンドラであるということとす。

更に先生は、密教というとか近寄りやすい、わかりにくい教えと受け止めがちな我々に「そうではないんだ、一定の基本を理解すると、密教はあらゆる人々に門戸を開いた開放的で、且つ奥の深い素晴らしい教えなんだ。」ということを云わんと

しているように思います。

今回初めて、本格的な密教思想に接した方には、一つ一つの言葉からして理解に戸惑う訳で、とても複雑で難しく感じたかも知れません。しかし「マンドラ」そのものが、理解するものというより、図像を通して我々の感性にうったえることの要素が強いものである以上、その形、色彩に何かを感じただけでも、一步密教に近づいたのではないかと思えます。

今回は、マンドラを通しての密教がテーマでありましたが、内容的には他の要素も十分に含めた、密教全般にわたる巾の広いものでありました。

今後は、先生の講義を踏まえつつより身近な内容で、この「たより」の紙面等をかりて、皆様とともに学んで行きたいと思っております。

集

特

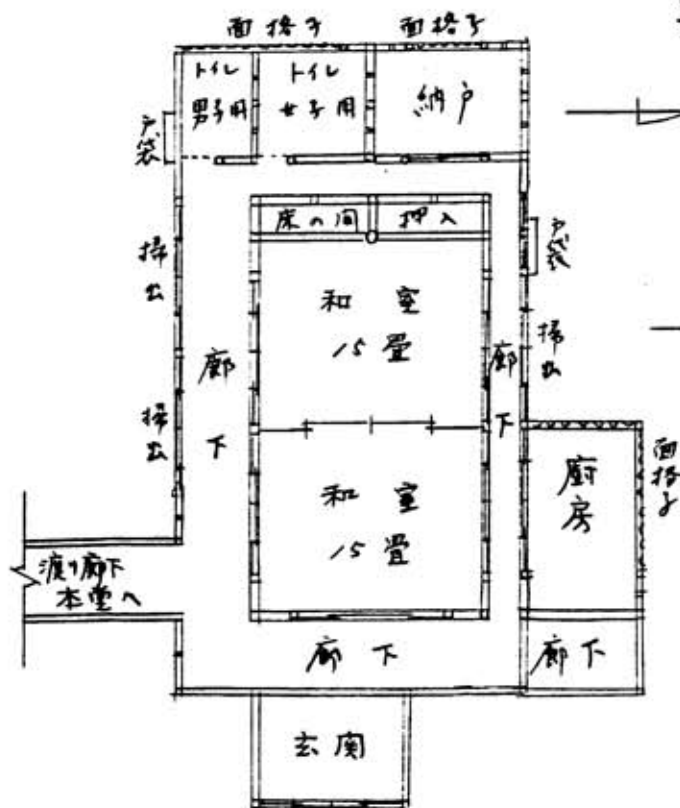
## 客殿新築工事進行

— 庫裏一部屋仮設工事 —

今春、檀徒総会にて決議されました客殿建設工事は、準備段階としての部分工事が始まりました。前号の「寺だより」で、今後の工事予定を示しましたが、一、植木移植工事は完了し、現在第二段階の、二、庫裏一部屋仮設工事を行っております。この後、庫裏一部取り壊し、土盛り、客殿建設、旧本堂取り壊し、境内整備の順で工事は進められます。新本堂がほぼ完成したにもかかわらず、引き続きの工事の為、落慶式は客殿工事等全て終わってからということになりますので、来年度後半になろうかと思えます。

新本堂を早く使用したい気持ちは、誰も一緒ですが今しばらくのご辛抱をお願い致します。

客殿計画平面図



客殿に関しては、具体的にはこれから、建設役員会等において、順次検討しながら進められて行く訳ですが、基本的には、本堂の永久性に対して、客殿は機能が最重要課題かと思われれます。

せがきえ  
お施餓鬼会云・成盛会云

七十五%の檀徒が参加

福田寺恒例のお施餓鬼会（せがきえ）が今年も七月二日（第一土曜）に行われました。今年も、昭和五十四年に、お施餓鬼を再開してから丁度十周年に当たりました。一回も欠かさず参加された熱心な方もおりますし、残念ながら一度も参加されずに、未だお施餓鬼でどんなことをやっているのか知らない方もおります。しかし、全般的に見まして、福田寺の檀徒は熱心な方が多く、修行する側としましてとてもやりがいがあります。

今年を例にとりましても、百四十戸の檀家数に対し、当日参加された

人数は一一三名（御詠歌十六名も含む）で、檀家だけの出席率をみますと七十五パーセントに当たります。

思い起こしますに、十年前、お施餓鬼を再開するに当たり住職として一番気をかけたことは、檀信徒の方に一人でも多く参加してもらおうということでした。参加者が少ないお施餓鬼なら再開する意味がないとまで思い詰めたものでした。御陰様で檀信徒の皆様のご理解を得て、初期の目的は達せられたと自負しています。さてさて、次回からは新たに再出発するつもりで、気を引き締めて、新鮮な法要にして行きたいと思つて

おります。

お気づきの点がありましたら、どうぞご教示くだされば幸甚に存じます。

縁起

縁起とは、文字通りに「縁りて起こる」という意味の他に、もう一つの意味があります。

それは、「長—短」「男—女」といったような相対的な関係です。たとえば、「親—子」を例にとれば、親は子があつてはじめて親となれる。ということは親は子どものおかげで親にしているのだと思ふ考え方より、はるかに素晴らしいと思ひます。

本山のしと

東寺(教王護国寺)

福田寺の本山は、五重の塔で有名な京都の東寺(教王護国寺)です。東寺は延暦十三年(七九四)桓武天皇が京都に平安京の造営をはじめて後、まもなく創建されました。それから約三十年後の弘仁十四年(八二三)嵯峨天皇が、空海(弘法大師)に東寺をゆだねられてから、寺院として本格的な構えを整え活動を始めました。

仏教は、私たちが日常の中の自分というものを静かに見ることを通して、人間として生を受けたことの意味を自分の内に問いかけていく教えです。その眼目は本当の自分との出会いであります。その出会いのチャンスは、今この時しかありません。人の営みは悲しく、その一生ははかないものでありますが、そこにこ

一度失えば再び得ることはないという生命の重みがあるのです。人は苦しみを嫌い、楽を求めて生きておりますが、この重い生において真に生きていく意味に出会うことが出来るなら、どんな苦勞も引き受けられるという願いのあることに気づかされるのです。

東寺は弘法大師が、その教えの実践の場所として活躍を続けた寺であり、千二百年の歴史を経た今日、脈々と受け継がれています。

秋の特別公開

・ ・ ・ ・ ・ 十 一 天

画 像 ・ ・ ・ ・

東寺宝物館

昭和六十三年九月二十日～十一月二十三日(六十三日間)

休館日：十月十七日(月)・十一月七日(月)

主催 真言宗総本山 東寺

主な展示品

十二天屏風(鎌倉・国宝) 兜跋毘沙門天立像(唐・国宝) 十二天儀軌(平安 画文) 後七日記(鎌倉・重文) 他

毎月二十一日は「弘法さん」の縁日で、境内は千軒以上の露店が並び二十万人以上の人出で賑わいます。来る昭和七十年(一九九五)は、東寺創建千二百年の勝縁に当たります。本山東寺はこれを機会に、社会浄化・弘法護持の浄業を推進せんが為、種々の記念事業を計画しております。弘法大師が密教の根本道場と定め、その活動の中心となした本山の興隆を末徒として心より祈念するものであります。